

## 【審査論文】

**Ralph Waldo Emerson のレクチャー  
“The Young American” をめぐる出版事情**

佐久間みかよ

**Ralph Waldo Emerson's Lecture “The Young American” :  
Transcendentalists and Young America**

Mikayo SAKUMA

**要旨**

This paper aims to reconsider the establishment and ultimate demise of the Transcendentalist Club in terms of the period's political background and burgeoning journalism. In particular, it focuses on one of Emerson's lectures, “The Young American,” and its subsequent publication to consider the contradiction inherent in American thoughts and transformation of 19<sup>th</sup> century American journalism. Emerson delivered a lecture titled “The Young American” in 1844. The original lecture indicates that his understanding of isolationism was inspired by political discourse; it was not explicitly political but was intended to influence politically minded American citizens. While Emerson was away to Europe, American foreign policy began to adopt principles of expansionism, supported by the Young America movements whose center was in New York. At that time, New York became a metropolis for culture that surpassed Boston and Philadelphia and its journalism tended to be political. Emerson's former nationalistic view encountered this new dimension and he omitted nationalistic parts of his lecture “The Young American” when he republished it in 1849. It marked the transformation of Emerson's thoughts and also revealed the contradiction inherent in the project seeking “American thoughts.”

**キーワード：**トランセンデンタリスト、エマソン、ニューヨーク・ジャーナリズム、孤立主義、アメリカン・スタディーズ

Transcendentalist, Emerson, New York Journalism, Isolationism, American Studies

**はじめに**

19世紀中頃以降アメリカでは様々な文芸グループができる。そのなかでも、トランセンデンタリスト・クラブと命名されたグループは、短期的ながらもその後の言論界に大きな影響を与えた。しかし、アメリカにおけるトランセンデンタリズムの意味はかなり多様なものである。Ralph Waldo Emersonは、“The Transcendentalist”というタイトルのエッセイで、「1842年の時点での観念論である」(CW 1, 201)と定義をしている。しかし、トランセンデンタリズムとは、トランセンデンタル・クラブに集まった人々がー

様に目指した、旧来の硬直した思想をうち破り新しいアメリカ文学・文化、そしてアメリカ人を再定義する動きそのものであったともいえる。トランセンデンタリズム、あるいはトランセンデンタルという言葉自体が時代の知的雰囲気を表していたといえよう。OEDでは、この言葉は、19世紀アメリカで起こった宗教と哲学を混交した思想と定義する。新しいアメリカの理想を、空間に浮遊するような眼球としてイメージするエマソン、コンコードの土と水に見いだすHenry David Thoreau。幅広いイメージを表す描写の類似性を辿っていくと、孤立すること、孤独であることが共通項として浮かんでくる。本稿では、この孤立することを、当時のアメリカ性をあらわすレトリックとして捉えることを前提とする。19世紀中頃孤立主義的レトリックが浸透してくる頃に、アメリカは国家としても拡大の時代を迎え、孤立の意味に変更が生じてくることになる。この経緯を辿って、孤立をレトリックとして内包していたトランセンデンタリストが、変化する時代にどのように対応したかをみていくのが本稿の趣旨となる。なかでもトランセンデンタリストの中心人物エマソンの変化を検証し、その意味を現代に連なる問題として捉えたい。

トランセンデンタリストの時代からほぼ100年後、1930年代から1940年代にかけて、アメリカン・スタディーズという学際的な分野がアメリカの大学のプログラムに入ってくる。興味深いことにこの時期は、新批評の勃興期と時を同じくしていて、アメリカ的教育、もうすこし厳密に言えば英文学科の学問分野の確立が必要な時代でもあったわけであり、2度の大戦をへて、アメリカ性の確立と対外的な米文学あるいはアメリカ学が手を携えたところにアメリカン・スタディーズが成り立ったといえる。しかし、その後のアメリカン・スタディーズは、冷戦および、アメリカ例外主義の影響から政治性を含むものとなる。アメリカと世界の捉え方について、Donald E. Pease, John Carlos Rowe, Paul Gilesらも、グローバル化した中のアメリカン・スタディーズの問題に焦点をあてている。こうしたアメリカン・スタディーズがかかえる内なる統一と海外への影響という二面的問題は、実は、19世紀のトランセンデンタリストが既に抱えていた問題でもあった。内なる統一（孤立性）と海外への影響（拡大主義）の矛盾と葛藤をトランセンデンタリストはどのように意識していたか考察していきたい。そのため、1840年代のエマソンの講演にまつわる情勢の変化を明らかにしていくことで、トランセンデンタリスト、および19世紀アメリカ文化の問題を分析していく。

## 1. エマソンの変化

まず、エマソンがなぜアメリカ思想を代表する人物として記憶されることになったかをエマソンの行ったレクチャー（講演）からみていきたい。エマソンの没後、息子のEdward Emerson、友人のJames Elliot Cabotによってエマソンの著作集が組まれるが、その経緯を述べた序文で、エドワード・エマソンは、「エマソンが生涯を通じて中心におこなった仕事は、講演をすることだったといえる」（W1, xxxv）と述べている。エマソンは牧師職を辞した後、非常に多くの講演を行った。なかでも、彼を一躍セレブリティにしたのは、1837年ハーヴァード大学のファイ・ベータ・カッパ協会で行った“The American Scholar”と呼ばれることになった講演である。エマソンはその後ボストン近郊に留まらず、ニューヨークから西部へと全国を歩き回って講演を行った。その軌跡を辿っていくと、エマソンの名声が次第に全国的なものになっていったことがわかる。牧師だったエマソンにとって、聴衆を前に話をするのは、説教とそれほどかわらないことであったかもしれないが、牧師をやめた後も、講演という形で依頼があいついでいた。そして、講演原稿だけでなく、書きためたものを含めてエッセイ集の形にして本として出版することで、Bonnie Carr O'Neillが指摘するように著名人（パブリック・インテレクチュアル）の原型的人物となっていく。

エマソンの活動期間はかなり長く、そのため変化も指摘されている。“Nature”での拡大する自我を高

らかにうたったものと、“Experience”の悲観的なトーンはよく指摘されるところだが、Stephen Whicherは、1840年代にエマソンはこれまでの信念に予期しなかった変化を経験したとする。その原因について、ウィッチャーは、エマソンをめぐる情勢の変化の他に、彼の息子Waldoの死の影響をあげている。また、Sacvan Bercovitchは、1850年代のエマソンのエッセイに注目し、エマソンの変化を1851年の“*Wealth*,” 1860年の“*Power*”にみており、産業資本家の時代を迎えた個人のあり方をあらわすようになったとしている。同じような捉え方として、Mary Caytonは、エマソンの後期の講演について、アメリカ的資本主義が生んだ大衆文化の要求を反映したものだとしている。

エマソンの講演、エッセイとも前期に比べて後期のほうが、抽象的で曖昧なところがなく、具体的でクリアなものにかわっていったことはよく指摘されるところであるが、これは同時代の聴衆の反応も同じものだったことがいえる。たとえば、エマソンの死後、追悼シンポジウムが開かれ、その様子が*Herald*紙に掲載される。そこでエマソンの友人たちは、彼の変化の原因を、ピーボティは2度目のヨーロッパ旅行、また、サンボーンは、息子の死とやはりヨーロッパ旅行としている。また、この議論の過程で聴衆から、アメリカ文学を理解できるかどうかは、エマソンを読めるかどうかだという発言があったとする。エマソンは、個人的な状況及び社会的な状況にあわせて変化していくタイプの知識人であったといえよう。

エマソンは、神学部に進んだ後、ボストン第二教会の牧師として職業人生をはじめるが、その後講演者となり自己を確立していく。エマソンの初期の講演をウィッチャーは、1833年から1836年までを試行期、1836年から38年で講演者として自己を確立した時期とする。「アメリカン・スカラー」で賞賛されるものの、その後1838年やはりハーヴァード大学で行った“The Divinity School Address”は、関係者から大変な不興を買うことになる。「神学部講演」の酷評について、エマソンは多く語らないものの、この9日後に行ったダートマス大学での講演“*Literary Ethics*”で、「[学者は] 孤独を花嫁のように抱く。そしてその喜びも苦悩も彼自身のものである」と述べており（CW IX,109）、「自然」でエマソン自身が述べる精神の孤立を実践しているとも受け取れる。

1836年ころからはじまるエマソンへの講演依頼は、最初はいわゆるテーマを指定された教養講座的なもので、ライシイアム運動とも連動して講演依頼があいついだ。やがてエマソンが講演者として名声を得ていくと、エマソン個人への依頼となり、エマソンが自分の好きなテーマで講演できるようになる。1840年代のエマソンは、講演者としてその名声が確立した時代であったといえる。が同時に、エマソンは最初のエッセイ集となる*Essays*を出版する準備とランセンデンタリストの機関誌『ダイアル』編集にむけた活動で多忙をきわめていた。

そんななかで行った“The Young American”というタイトルの演説に注目したい。エマソンは、“The Young American”という講演を1844年2月7日にBoston Mercantile Societyで行ったが、これを1844年4月出版の*The Dial*で、さらに1849年9月に*Nature, Address, and Lectures*の本に収録し2度出版した。しかし、2度目となる本に収録する際にかかなりの削除を行っている。

エマソンの日記には、のちにこの講演で使うことになる箇所が何カ所もあり、おそらく時期的にみて、講演後すぐに出版した『ダイアル』が講演原稿に近いと思われる。しかし、『ダイアル』に収録したものから、後にかかなりの部分を割愛している。削除した箇所について、ライブラリー・オブ・アメリカ版を編集したJoel Porteは注で以下のように述べている。「この講演は、最初『ダイアル』（1844年4月発行）に収録されたが、その後1849年にエマソンが大幅に改訂したものである。アメリカがヨーロッパ文化とヨーロッパの批評に依存していること、ボストンと鉄道の発達、アイルランド人労働者の搾取などの箇所を削除している」（1315）。この経緯について、ベルナップのエマソン全集（CW）に注釈を加えたRobert E.

Spillerは以下のように解説している。この講演を行った時期(1843年から1844年にかけて)の3つの変化、鉄道の発達、“trade”(産業資本主義)の発達、民主主義を標榜する民主党の発展とその派生として後に「明白なる天命」をキャッチフレーズとした領土の拡大を講演時エマソンは意識していたとしている。そしてこの方向を、疑問を持ちながらも、最終的にアメリカの自由を促進するものと考えていた。その結果、やがて活発になる政治色の強いヤング・アメリカ運動と結びつくような講演となったものの、後1849年に改訂する時には、エマソンが当時の政治運動と必ずしも一致した意見を持っていなかったため、ナショナリズム的なところ、鉄道の発展、アイルランド移民について削除することになったとしている(CW IX 217-21)。

1849年の修正をエマソンの変化を考える際の象徴的な変更であると捉えることができるのではないだろうか。聴衆を相手にする講演者としてのエマソンと、文筆家としてのエマソンという二つのキャラクターを考えてみる必要もあること、そして時期に応じて臨機応変に変化するエマソンの社会に対する感度という2点が象徴的に現われたものとして、そのコンテキストをみていく。

## 2. 講演者としてのエマソン

まず、講演者としてのエマソンの特徴を考察していきたい。講演者としてエマソンに依頼が多かったのは、講演者としての特質にもよるところがある。エマソンの講演を必ず聞きに行くという層がいるところから、エマソンの講演そのものに人を惹きつけるものがあったと考えてよいだろう。その人気を証拠づける講演の様子についていくつかみていく。

エマソンの講演の様子は、翌日の新聞で紹介されることがかなりあった。その内容は、講演内容より、エマソンがどんな服装でどんな様子で講演したかということが多く書かれていた。エマソンという個人がその服装までが注目される有名人として、ボニー・カーらがいうセレブリティ文化の中心にいたことがわかる。

エマソンの講演については、とりわけ若者の共感を呼んでいたことがエマソンの講演の感想を残した記録から推し量ることができる。たとえば、一つはThomas Augstが*Clerk's Tale*で紹介している、名も無いクラークたちの一人、Benjamin Tiltonというボストンの若者の感想である。エマソンの1843年のレクチャー“Domestic Life”の感想として、その年聞いたレクチャーのなかで最高のものであったといい、「エマソンの思想と理屈には大変な独創性がある。テーマの扱い方にも才能を感じる」とし、エマソンが子ども時代は猛烈な勢いで感化されやすいことを「機関車の力」とした比喩を印象的なものとして書き残している(Augst 128)。エマソンは若者が反応しやすい、時代にあった比喩や説明をしていたことが想像できる。また年代は少しあとになるが、エマソンに影響を受けたことを書き残したのは、第20代大統領となるJames Garfieldである。彼は大学生の時にエマソンの演説を聞く。そして日記に「(エマソンは)これまで聞いたなかできわめて独創的は思想家である。ゲーテの大砲のように、演説の発する電光は、恐ろしいほどまっすぐに聴衆に落ちて来た。この雄弁の嵐を聞いた後、私は眠れなかった」と書き残し、友人にエマソンの演説を聞いた日を「私の知的生活の始まりとした」と言っていた(Smith 76)。この演説は、1854年8月15日マサチューセッツ州のウィリアムズ大学の卒業式の際にAdelphic Unionで行われたものだが、同じ演説を聞いたTheodore Clapp 牧師は、「(エマソンの)表情は、神々しいほどおだやで、美しく、慈愛にあふれ、見ていて興奮するものだ」(*Pennsylvania Portrait of Harrisburg*, Sep.30,1854)と述べていた。エマソンが、講演者として人の心を動かす話し方をしていたことがわかる。

こうした聴衆の反応をえることをエマソン自身はかなり意識していたと思われる。今回問題としたい



“The Young American”の講演について、日記には次のように書かれている。講演にあたって、「人の心の中に私の考えが絵になるように、そしてそれが心を動かすようにしたい。[講演する] 人は、ただ、講演を読むだけでなく、講演に集中し、講演の全体像とバランスを保ち、夜間講演の聴衆たちになかなか気がつくことのない極意を教え、話者との関係を結ぶようにすることだ」と記している。

エマソンがこの時相手にした聴衆は、Boston Mercantile Library（以下BML）の会員であったが、このクラブは青年実業家たちが中心にメンバーになっていた。BMLは、1820年に設立され図書館兼倶楽部で、対象は青年実業家であり、2ドルの年会費の他に本を一冊または2冊寄贈するか2ドル支払うのが条件であり、年に何回か著名人を呼んで講演会を持っていた。知事のEdward Everett、弁論家で有名なRufus Choateらである。1840年代くらいからエマソン、Theodore Parker、Henry Hedgeらトランセンデンタリスト、Francis Parkman、Henry Ward Beecher、Ezra Stylesら知識人がよばれて講演することになる。こうした状況で若い実業家たちを前にエマソンが行ったのが、“The Young American”である。周到に準備した講演について日記に先の記述に続けて、「講演者のその努力によって聴衆は静まりかえり、すばらしい音楽のように、賞賛されるのである。…こうしたことを私は最も望んでいる」(JMN IX,70-71)と印し、聴衆を前にしてエマソンが彼らを感化していく実感を感じとっていたことが感じられる。若い実業家との一体感を求めて、講演では、エマソンは彼らが身を置く産業社会に関連づけようと、原稿からの逸脱もあったのではないかとも思われる。しかし、時代が進むにつれ、つまりヤング・アメリカ運動やManifest Destinyなどを通じて、アメリカが拡張の時代を迎えるにつれ、エマソンと時代の方角との距離が生じてくるのである。後にこの講演における多くの削除は、スピラーが論じる1844年の彼の意識と齟齬を生じた部分である。しかし、ここで考えなければならない様子がもう一つある。そこにこれまであまり指摘されていなかった地域的な問題、ボストンとニューヨークの対立関係がある。実は、エマソンの講演の反応もボストンとニューヨークでは、ニュアンスの違いがある。

当時ニューヨークで駆け出しのジャーナリストであったWalt Whitmanがエマソンの講演の感想を述べているものがある。「このトランセンデンタリストは会場を大入りにした。と言っても美しいご婦人はほとんどおらず、不細工な、インテリの女性たち、バイロン風の襟の若者、医者、牧師たち、産業家や奴隷制反対論者、メモをとっている編集者、そして様々な文人。グリーリーはうっとりとして聞いており、何か面白いことがあると、ほとんど5分おきだが、水から飛び出す魚のように、あるいはくすぐられた少女のように飛び上がって、前や後ろを見回すのである。…テーマは、「時代の詩人」だった。人を愚か者と読んだ最初の人が詩人だと言う。なぜなら詩人の仕事は魂の感情や気持ち、比喻を表現するものだからだということになる。しかし、彼の思想をこんな風にまとめるのは、誤解を与えることになろう。講演自体は、内容もスタイルも、これまで聞いたなかで最も豊かで美しい表現だと言え十分だろう」[March 7, 1842] (Rubin 105)。この講演は、“The Young American”以前にエマソンがボストンで行った“The Times”の8講演シリーズの一つが、ニューヨークでも行われたものである。ホイットマンは、署名付きではないが、エマソンの講演を自分が編集するAuroraとアメリカ・ジャーナリズムの父ともいえるHorace Greeleyの新聞『トリビューン』に書いている。もともとニューイングランドの出身であるグリーリーは、この演説を絶賛している様子だが、ホイットマンのトーンは皮肉が混じったものとなっている。そこには、ボストン中心のトランセンデンタリストへの揶揄が込められている。当時のボストンとニューヨークのジャーナリズムの成り立ちはそれぞれ特徴があり、対立関係にあったともいえるからである。

### 3. ニューヨーク・ジャーナリズムの台頭とヤング・アメリカ運動の影響

ニューヨークとボストンの出版界の事情をみるには、エマソンが最初の講演を行った1844年と2度目の出版をした1849年の歴史的事情の違いにまず注目する必要がある。1844年から1849年のアメリカ史では、大きな事件ではメキシコ戦争、そしてより地域的にみえていくとヤング・アメリカ運動のひろがりがある。そして興味深いことに、この間エマソン自身は、2度目の訪欧を行っている。

メキシコ戦争は、それまでのモンロー・ドクトリンを修正したものであるといえ、ワシントン、アダムズと続いた拡大への戒めを破っての膨張政策をとる。この膨張政策を是認するかのようなスローガンとして引用されるのが、James O'SullivanのManifest Destinyというキーワードであり、それを象徴するのがヤング・アメリカ運動である。ヤング・アメリカ運動は、文学運動、政治運動と多岐にわたり、Nathaniel Hawthorne、Herman Melvilleだけでなく、Edgar Allan Poeも巻き込むものだが、なかなか定義の難しい広範囲の運動である。

共通項としてあるのが、ニューヨークを中心にしたデモクラシーの拡張運動であり、Edward Widmerの著書*Young America: The Flowing of Democracy in New York*のタイトルが簡潔に内容を要約している。ウィドマーは、ニューヨークを中心にしておこったヤング・アメリカ運動を大きく2つにわけ、第一次ヤング・アメリカ運動と第二次ヤング・アメリカ運動では性格を異にしているとする。第一次ヤング・アメリカは、1840年代のDuycknickら知識人の仲間を中心としたもの、第二次ヤング・アメリカはこれとは異なる拡張主義者たちのものとする。第一次ヤング・アメリカの文学者たちはメキシコ戦争の推移に困惑し、メキシコ戦争には反対するようになる。非常に無邪気な民主主義信奉の世界が、メキシコ戦争によって崩壊してってしまう様を、ウィドマーは1848年に出版されたポーの「ユリイカ」の宇宙の崩壊と結びつけて説明する。

ウィドマーが述べるように、ヤング・アメリカ運動は、ニューヨークを中心に広がっていくものであり、その人々のコネクションもニューヨークという場所で結びつく。第一次ヤング・アメリカの中心人物ダイキンクは、アメリカ固有の文学を提示しようとしていた。そして作ったのが、The Library of American Booksであり、ニューヨーク・モーニングタイムズ誌にもその広告をだす。このシリーズには、ホーソーンの“Once Told Tales,” Margaret Fullerの“Papers on Literature and Art,” William Gilmore Simmsの*Views and Reviews in American Literature*, ポーの*The Raven and Other Poems, Tales*, メルヴィルの*Typee*などをいれるが、売れ行きは予想を下まわるものだった。このダイキンクと「マニフェスト・デスティニー」のオサリヴァンの二人は、デモクラシーの確立、ジャクソンの民主党支持という思想的共通項で結びついていくわけだが、二人ともコロンビア大学の卒業生で、ニューヨークという場所を契機で結びついていく。

一方、ボストン地域で生まれ育ったエマソンは、ヤング・アメリカ運動が、分野も文学、ジャーナリズム、宗教など広くゆるい集まりであったものの、政治色が非常に強かったところから、“destructive, not constructive” (*JMN VIII* 314)と表現し、“politico-literary”な色調に反感を示している。しかしながら、“Young American”という言葉を使ったのが、エマソンのほうが最初であったことになる。

ボストンとニューヨークの間には、明らかに文化の違いがあり、Lawrence Buellは、ボストン文化がハーヴァードを中心とした教養重視の教育・研究組織から出来上がっていると指摘する。これに対し、ニューヨークは、ボストン・ブラーミンのような関もハーヴァードのような組織もない自由な雰囲気があったといっても間違いはない。そこから二つの文化圏の対抗意識も生まれると思われ、ホイットマンのエマソン講演評は、エマソンに対するニューヨークのジャーナリズムの反感のあれわれともいえよう。

このボストンとニューヨークの対抗関係については、オサリヴァンの盟友William Jonesが次のように

述べている。『『ピューリタンのなニューイングランドの人が、いったいどうやって演技の印象を伝え、網の目のようなプロットを理解し、バレエの挿話を分析したりできるのか。』そう言うことで、彼はニューヨークがアメリカ的な洗練を自負するライバルたちがもはや無視できない特異な批評をしている、と言ったのだ（Widmer 91）。一方、ビュエルによれば「ニューイングランドは、東海岸の富を持ち、[大陸への]旅とハーヴァードでの地位の提供という支援を行うことができる利点をもつ。そして学問を尊重するという伝統がある。また、ハーヴァード大学自体が財産である」（38）と述べる自負を持っていたとする。

ダイキンクのThe Library of American Booksの試みも、ボストンに対抗したニューヨーク趣味のアメリカ文学ということもできよう。ニューイングランドにないアメリカ的文学をもとめて、その先鋭をポーに見いだしていったとMeredith McGillは論じている。また、ニューイングランド的なものから脱却した批評を求めるオサリヴァンたちをウィドマーは、“The New Criticism”というセクションタイトルにして論じている。こうした地域的な事情は、本稿「はじめに」で述べたアメリカン・スタディーズ確立と南部中心のニュー・クリティシズム確立が時期的に同じくらいであるという状況を彷彿とさせるもので、地域的な対抗関係がアメリカの文芸思想を牽引していく要素を19世紀においても確認できよう。

ダイキンクが目指したのは、Americaとyoungを結びつけて新しい国民文学、国民性を形づくろうとするレトリックを作ろうとしたことだが、これはまさしくヤング・アメリカ運動の進展で頂点を迎える。ウィドマーは、『ヤング・アメリカ』の最終章で、ヤング・アメリカというレトリックは、20世紀後半のクリントンにまで受け継がれているとする。クリントンは就任演説で“it is the destiny of American to remain forever young”とのべ、限りなく若い国アメリカというレトリックをアピールする。そしてこれは、21世紀にはいり大統領となったオバマも2015年の所信演説State of Unionで受け継ぎ、“A bright future is ours to write. Let’s begin this new chapter together”と新しさー若い力を強調している。しかし、このレトリックの背後で、ヤング・アメリカ運動が、メキシコ、キューバなど国境膨張政策を後押しするものとなり、近隣国家にとってヤング・アメリカは決してポジティブな意味ではなく脅威でもあったことは忘れてならないとウィドマーは締めくくる。

エマソンの“The Young American”という講演がヤング・アメリカ運動と直接的な関係があったのか、定かにする資料は残っていないが、エマソンが『ダイアル』に載せたことから、このときの聴衆以外にもYoung Americanという言葉の響きが広がっていったことは予想に難くない。また、youngという形容詞がつく政治運動は、ヨーロッパ各地ですでに始まっており、*Democratic Review*紙は、ヨーロッパの独立運動をYoung Europe として紹介していた。Young Americaという言葉概念化してヤング・アメリカ運動の人たちが使うのは、ウィドマーによれば、1845年6月30日のCornelius Mathewsのニューヨーク大学での演説 [Cornelius Mathews, *Americanism* New York: 1845, 15, 17-18] からだとする（60）。また、Eyalは、エマソンが“The Young American”でこの言葉を最初に概念化して使ったとし、その後急進的民主党支持のGeorge Henry EvansがYoung Americaという新聞をつくり、その後コーネリウス・マッシューズが、ニューヨーク大学でYoung Americaというタイトルの講演を行い、Edwin De LeonもSouth Carolina Collegeの講演でこの言葉を使っていくとしている(5)。起源がどこかは諮りがたいが、この当時、アメリカと若さを結びつけてアメリカ性を訴えるレトリックが流通していたのは、間違いのないところであろう。同時に、このとき、ボストンとニューヨークの対立関係の中から、ニューヨークのジャーナリズムが圧倒的な発展を遂げることになる。

ニューヨークがアメリカの出版の中心となっていくのは、19世紀中頃である。古典的なものでは、Frank Luther Mott、また近年の*A History of the Book*、そしてウィドマーによると、1830年代からのニュー



ヨークの発展は目覚ましく、1837年の恐慌後、大統領となったMartin Van Burenのもとで、大きさと富の集積の点で、他の都市ボストン、フィラデルフィア、ボルティモアを大きく引き離していく。その勢いは、ジャーナリズムにもおよび、印刷方法の発展ともあいまって安価な日刊紙の発行が相次ぎ、1850年までに、104誌が発行され、その年間発行部数は78,747,600部となる。(Widmer 11)。ボストンが機関組織を中心に文化が発達したのに比べて、ニューヨークは短期間に、富の力で発展していく。おそらくその象徴的なものが日刊紙の発展である。日刊紙という毎日読み捨てられるephemeral、短命な、ものでも、交通網の発展で各地に届けられ読者を獲得するという今までにない方法の文化形態の変化の牽引力となっていく。こうしたジャーナリズムの発展に活路を見いだそうとニューヨークに活動の拠点を移すのがポーであり、ダイキンクたちは彼をヤング・アメリカ運動へ関わらせることになる。ポー自身は政治的なコミットメントを避けつつ、ニューヨーク・ジャーナリズムの世界に入っていく。

ポーと同様に、発展するニューヨークにボストン圏の作家たちも関係を持つことになる。ホーソーとMargaret Fullerである。ホーソーは、トランセンデンタリストとは距離をとっていたので、ボストンとニューヨークの積極的な仲介者とはいえないが、フラーはまさしくその役割を演じた。フラーは、グリーリーを介してニューヨーク・ジャーナリズムとの接点を与える。グリーリーは、ニューヨークの生まれでなく、ニューハンプシャー、つまりニューイングランド出身だったこともあり、ボストンとの繋がりがあった。妻のメアリーはマーガレット・フラーの行う“Conversation”に加わる。グリーリー自身もボストンを訪れ、フラーらと知己を得、フラーに*New York Tribune*紙の編集を依頼することになる。また、フラーの最初の著作*Summer on the Lakes*は、ニューヨークの出版社から出てナショナルな本になる条件を与える。事実この本は、グリーリーの*New York Tribune*、ダイアルを評価していた*Christian World*だけでなく、ヤング・アメリカのダイキンク、民主党系の*Boston Morning Post*、反トランセンデンタリス系の*Boston Courier*、Whig系の*Daily Advertiser*、女性誌の*Godey's Lady's Book*、フィラデルフィアの*Graham Magazine*でも絶賛されることになる。一方エマソン自身は、ニューヨークを訪れ、ニューヨークのジャーナリストと関係を持ち、ソローにニューヨークの出版社とコネをつけるように彼をニューヨークに送っておきながら、自分はニューヨークの出版社から本を出すことはなかった。

さて、こうしたニューヨーク文化の発展と拡大期におこったのがメキシコ戦争、それにともなう領土拡大と奴隷制の問題であったといえる。この拡大政策、また奴隷制の拡大に対して、ジャーナリストは二分していくことになる。ウィドマーが分析するように、ヤング・アメリカンのジャーナリストも積極的に領土拡大に賛成するものと、メキシコ戦争の結果と奴隷制の拡大から反対するものへと別れてくる。

トランセンデンタリストのなかで最も早くメキシコ戦争に反対したのが、ソローである。拡張主義を声高に主張するニューヨークのジャーナリストに比べ、拡張戦争への反対が、コンコードに住むソローから始まったことは象徴的な意味があると思われる。しかし、エマソンは、メキシコ戦争がはじまり、ソローの投獄事件後、翌1847年にヨーロッパに向かっており、フラーもトリビューン紙の特派員として1846年にイタリアに行き、二人ともメキシコ戦争がすすんでいく間はヨーロッパにいて、戦争報道を直接的に体験していない。大きな歴史的イベントをエマソン、フラーとも自国で体験していないのである。そして、ヨーロッパから帰国したのち、1849年エマソンが行ったことが、“The Young American”を含む*Nature, Addresses, and Lectures*の出版である。ニューヨーク・ジャーナリズム中心のアメリカの拡大傾向への反応として、この本の出版をみることも可能であろう。そこで見えてくるのが“The Young American”の改訂の意味づけである。



## おわりに——“The Young American” の改訂の意味するもの

エマソンの行った1849年の改訂について、少し詳しく見るために、全体の構造と削除箇所を見ていきたい。このレクチャーの骨子は、アメリカを未来の国と捉え、若い聴衆に向けて自由と福祉を実現する国にするようにと語りかけたものだといえる。そこで削除されたのは、具体的にアメリカの状態を述べた箇所、およびアメリカにおけるヨーロッパ文化の移植についてであった。この削除の背景に、ヤング・アメリカ運動の急進派の台頭と、自分が不在の間進んだメキシコ戦争への反応として見ることも可能である。なかでも冒頭の削除箇所の多さは目をひく。以下のアンダーラインの部分が全く削除され、改訂版では、「この間違った状態」という文につながっていく。

紳士諸君、

私たちの国は、知的文化と我々の義務をそれぞれ別の国からえている。私たちの本はヨーロッパのものである。私たちは、シェイクスピア、ミルトン、ベーコン、ドライデン、ポープの名声と影響のもとに生まれた。私たちの大学の教科書は、バトラー、ロック、パーレー、ブラックスストーン、スチュアートが書いたものだ。家で読む本は、クラレンドン、ヒューム、アディソン、ジョンソン、ヤング、クーパー、エッジワース、スコット、サウジー、コールリッジ、ワーズワース、エディンバラ・レビューとクォーターリー・レビューだ。民主主義を習うのに中世の学校に行くようなものである。アメリカの若者は、教育と仕事の間に大きなギャップがある。たとえていうと、十分に教育された銀行家の娘で、教育をすべておえたところで、父親が破産したようなものである。そんな不幸で病気になった父親に何ができるかと尋ねられたようなものである。服を整え、パンをこねたり、牛乳を温められるだろうか。できないだろう。でも、ワルツは踊れ、紙細工や絵画もでき、写し絵もできる、刺繍もできる、クラビコードも弾ける、ドイツ語の歌も歌える、劇もたしなむ、テーブルセッティングもできる、他にも有用で欠かすことのできないことができる。私たちの若者の教育はこのような状態なのである。思考そのものが、王国的な組織から発展したもので、一方でそこで栄えたものは、想像力も理解力も育むものとなっていないのだ。

この間違った状態は新たに直すべきである。アメリカは、その子どもたちの感覚と想像力を育み始めており、ヨーロッパからは離れつつある。(CWI 222)

「この間違った」という指示語が具体的にさしていたものが削除されたものが改訂版となっている。ある種の欠落を含んでこの演説文は進んでいくことになる。その欠落こそエマソンが、自分が不在の時にアメリカがとった方向に対して抱いた疑念が現れているといえるのではないだろうか。エマソンは、オサリヴァンたちのヤング・アメリカ運動を“politico-literary”という言葉でうさんくさいものと感じていた。そのオサリヴァンが*Democratic Review*の1845年の記事で、“manifest destiny”という言葉を使い、テキサスの併合を含めてアメリカの拡張を訴えた。オサリヴァンは、テキサスをアメリカに併合する際に、イギリスやフランスなど外国が介入する必要などないと述べ、その理由を「神の摂理によって毎年何百万人と増える人々の自由な発展が大陸中に広がっていくのは、明白な天命（manifest destiny）である」と述べる（“Annexation”）。エマソンがこの記事を読んだ時、イギリス、フランスなどの影響を排除しているという部分には、自身が1844年に行った講演でイギリス、ヨーロッパの影響から脱却と言った部分との類似を感じても不思議はない。ヨーロッパから帰ったエマソンには、多くの指摘があるように変化があ

る。この時再訪したヨーロッパでは、前回の訪問と違い、講演の依頼があり、イギリス各地で講演をしている。自分の著作が海外で紹介される感触を身を持って感じたであろうことは想像に難くない。もはやアメリカ国内だけでない、西欧という読者をエマソンは想定している。ヨーロッパから帰国したエマソンは、国内で領土拡大がもたらす奴隷制の問題と、さらにラディカルになるオサリヴァンらの言説に遭遇する。この国内の変化を前にして、講演“The Young American”が、西欧的なものをことさら意識させることでナショナリズムを発動させる箇所を削除しながら推敲していったのである。極度にナショナリスティックになるニューヨークのヤング・アメリカ運動の人々に対して、エマソンは世界のなかのアメリカを頭において推敲を加え、若きアメリカ人像を提示したともいえよう。ナショナルなニューヨーク派に比べ、ビュエルはニューイングランド知識人はコスモポリタンの要素が強いと指摘する（371）。2度目の渡欧後の推敲から、エマソンがナショナルからインターナショナルへ、言い方をかえればコスモポリタンの要素を強くしていった一端がうかがえる。アメリカ文化もアメリカの国民性も、国内的な言説だけでなく、グローバルに捉えようとする思考の変化をエマソンの推敲にみることも可能であろう。エマソンは、講演を行い、それを元にして著作にしている。その際、講演での聴衆との一体感を一度離れ、時代の変化を敏感に感じながら、書物として自分の思考を再構築しているともいえよう。

20世紀に入り、アメリカン・スタディーズという学問分野ができあがるが、これはナショナルとグローバルという対立する二面性から生じる葛藤を強いられながら、アメリカ像を追っていくことになる。エマソンのふたつの“The Young American”の間にある亀裂——とりわけ最初の箇所の省略からうまれた指示内容の欠落は、1840年代のアメリカの今後に対する空白であり、亀裂であるといえる。エマソンがヨーロッパにいた間に進行したメキシコ戦争は、エマソンにとっては政治的空白なのであり、その間の解釈の違いをエマソンの推敲による空白はあらわしているともいえる。この時期は、ニューイングランド的メンタリティとニューヨーク的メンタリティが両者とも特徴的に別れてきたといえる。ニューイングランド的メンタリティは旧来のピューリタンの体制的なものから生まれつつもその伝統を破って新しいアメリカ文化をつくらうとするトランセンデンタリストの活動からうまれたコスモポリタンの要素が特徴といえ、それはアメリカを外から見ようとする傾向といいかえられる。そして一方、ニューヨークは、もともと様々な地域から人々が集まるコスモポリタンの要素を持っていながら、いや、それゆえに結束を求めて非常にナショナルな言説のもとに、アメリカの拡大を称揚していく傾向、求心的な傾向がある。このふたつが外向きと内向きの傾向をそれぞれ逆のイメージを持つ、孤立と拡大というレトリックに収斂させてアメリカ像をつくりあげていくとひとまずまとめるとすると、そこから生まれたアメリカ文化あるいはアメリカそのものを研究するアメリカン・スタディーズは、歴史の流れにそって二つのバランスを図っていくことが運命づけられていったといえよう。そしてその原型的な姿を変容するエマソンに見ることができるのである。

## 引用文献

- Augst, Thomas. *Clerk's Tales: Young Men and Moral Life in Nineteenth-Century America*. Chicago: University of Chicago, 2003. Print.
- Buell, Lawrence. *New England Literary Culture from Revolution through Renaissance*. Cambridge ; New York: Cambridge University Press, 1986. Print.
- Cabot, James Elliot. *A Memoir of Ralph Waldo Emerson*. 2 vols. Boston: Houghton Mifflin, 1887. Print.
- Capper, Charles. *Margaret Fuller: An American Romantic Life*. New York : Oxford University Press, 1992-2007. Print.
- Cayton, Mary Kupiec. *Emerson's Emergence : Self and Society in the Transformation of New England, 1800-1845*. Chapel Hill: University of North Carolina, 1989. Print.

- Emerson family., and Ralph Waldo Emerson *Emerson Family Papers, 1699-1939*. Print.
- Emerson, Ralph Waldo. *The Collected Works of Ralph Waldo Emerson*. Eds. Robert Ernest Spiller, et al. Cambridge, Mass. : Belknap Press of Harvard University Press, 1971-2013, 1971. Print.
- . *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson : With a Biographical Introduction and Notes*. Ed. Edward Waldo Emerson. Cambridge : Riverside Press, 1903-. Print.
- . *Essays and Lectures*. Ed. Joel Port. New York: Literary Classics of United States, 1983. print.
- . *Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*. 16 Vols. Eds. William Gilman and others. Cambridge, Mass: Belknap Press, 1960-. Print.
- Eyal, Yonatan. *The Young America Movement and the Transformation of the Democratic Party, 1828-61*. New York : Cambridge University Press, 2007. Print.
- Fuller, Randall. *Emerson's Ghosts : Literature, Politics, and the Making of Americanists*. New York: Oxford University Press, 2007. Print.
- McGill, L. Meredith. *American Literature and Culture of Reprinting, 1834-1853*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2007. Print.
- O'Neill, Bonnie Carr. "'The Best of Me Is There': Emerson as Lecturer and Celebrity." *American Literature*. 80 (2008) . Print.
- Rubin, J. Joseph and Charles H. Brown. *Walt Whitman of the New York Aurora Editor at Twenty-two*. Carrolltown: Bald Eagle Press, 1950. print.
- Smith, Theodore Clarke. *The Life and Letters of James Garfield*. 2 vols. New Haven: Yale University Press, 1925. print.
- Whicher, Stephen E. *Freedom and Fate; an Inner Life of Ralph Waldo Emerson*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press 1971. Print.
- Widmer, Edward L. *Young America : The Flowering of Democracy in New York City*. New York : Oxford University Press, 1999. Print.
- Williams, Robert Chadwell. *Horace Greeley : Champion of American Freedom*. New York : New York University Press, 2006. Print.
- Winship, Michael. *American Literary Publishing in the Mid-Nineteenth Century: The Business of Ticknor and Fields*. New York: Cambridge University Press, 1995. Print.

本稿は、2015年3月28日の日本アメリカ文学会東京支部での口頭発表に基づいたもので、科研費26370324の助成を受けたものです。

佐久間みかよ（和洋女子大学 人文社会科学系 教授）

（2015年10月6日受理）